

東北学院大学 チャペル ニュース

春季特別伝道礼拝
特 集 号

第93号 2005年6月
東北学院大学宗教部
仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
〒980-8511 (022) 264-6428

● 巻頭言 ●

「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、 練達は希望を生む」

(ローマの信徒への手紙五章一〜五節)

宗教部長 佐々木 哲 夫

人が生きるには、確かな希望が必要です。アウシュヴィッツ収容所から奇跡的に生還したヴィクトール・E・フランクルは、彼の著書『夜と霧』の中で「かくしてわれわれも希望にからみつき、最後の瞬間までそんなに事態は悪くないだろうと信じた」と記し、希望が生きる支えであったこと、また、その希望が絶望に変容したとき、多くの仲間が命が衰滅したことを伝えていきます。この歴史的出来事は、私たちに、途中で消え去るような希望でなく、確実な希望

が必要であることを教えておられます。聖書に「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生む」との言葉があります。苦難は誰にでもつきものですから、この言葉はわたしたち全てに対して語りかけられているものと理解されます。確かに、災難や病気などの苦難を体験すると忍耐が養われます。消極的に我慢するだけの忍耐ではなく、創造的で不屈の忍耐です。その忍耐が、練られた品性を生み出すということです。精練されるたびに純度を

上げてゆく貴金属のように。そして、練達は希望を生むのです。聖書には「希望はわたしたちを欺くことがあります。死」とも記されています。死に直面するような究極的苦難に陥っても決してわたしたちを裏切ることのない希望、だということです。欺くことのない希望とは、いったいどのようなものでしょうか。聖書の文脈をたどってみますと「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」との言葉をも見いだします。「神の栄光」とは、神の顕現をも表現しますから、「神の栄光にあずかる」とは、神と共に存在になることと説明できます。まさに生と死を超越する永遠的希望です。それを、「信仰」や「救い」との用語を援用しつつ詳解することも可能でしょうが、ここでは、希望という言葉で一貫したい

と思います。先般、知人から突然電話がきました。入院しているのに会いに来てくれなしかとのことです。早速面会しますと「キリスト教では死をどのように考えるか話してくれ」と真剣に質問されました。私は、「死は勝利にのみ込まれた。死よ、お前の勝利はどこにあるのか」などの聖句を引用しながら、神の栄光にあずかる希望について話しました。それは、彼が天に召される一ヶ月前のことでした。人が生きるには、確かな希望が必要です。わたしたちが体験する苦難も練達も、希望へと結びついています。しかし、大切なことは、神と共に生きるといふ確かな希望に結びつくということです。確かな希望は、確かな人生の目的をも生み出すものと考えています。

神の居場所

— 森の神と愛の神 —

日本基督教団 緑聖教会 牧師
濱 田 辰 雄



●ヨハネの手紙一

四章七—一六節

神はどこに在るのか？これは古來人間の根源的な問いであった。人の生き方は、神の存在の有無に深く関わる。明治の文豪夏目漱石は名著『草枕』の中で「人の世を作ったものは神でもなければ鬼でも

ない。やはり向う三軒両隣にちらちらする唯の人である。

唯の人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりも猶住みに

くかろう。越す事のならぬ世が住みにくければ、住みにくい所をどれほどか、寛容（くつろげ）て束の間の命を、束の間でも住みよくせねばならぬ。」

明治の近代人漱石からすれば、人の世を作ったものは神でも鬼でもない、という考えは当然のことである。そして現代日本人の多くはこの考えであるかもしれない。

しかし問題は「人の世の住みにくさ」である。現代は明治と比べてはるかに住みにくくなっている。先日一〇七人

の死者を出したJR西日本の電車重大事故をはじめ、航空機事故や医療ミス、増加する凶悪犯罪、そして毎年三万人以上の自殺者。また若者の引きこもりやニートも増加している。

このような現状の日本で、漱石とは違って神を全面にだして「住みにくさ」を乗り越えようとしている宗教がある。それは日本古来の宗教である神道である。神道は日本固有

の自然及び農耕・漁業と結びついて営まれてきた宗教である。そしてこの国の神はあらゆる自然に遍在するのであるが、一番象徴的な存在場所が森である。古い神社はみな鬱蒼とした森にかこまれている。中世の歌人西行が伊勢神宮を詣でた際、五十鈴川をは

さんで対面から遠く神宮を拝んでこう歌ったという伝説がある。「なにことのをはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」。これは確かに森の中にいます神を感激して歌ったのである。「鎮守の森」が神道信仰の生命である。神道関係者は人の心の立て直しという観点から各地で森を復興させることに力をそそいでおられる。自然保護という観点からもこの主張には説得力がある。

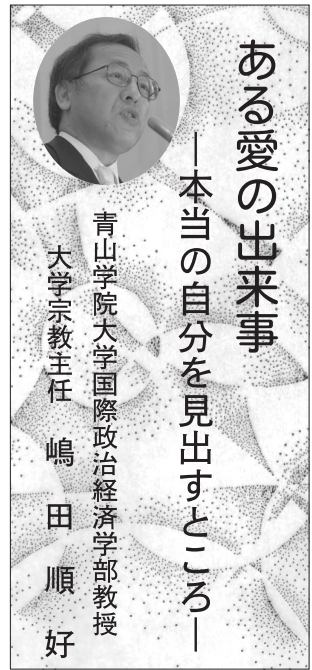
さてキリスト教は、前身であるユダヤ教ともども自然の中に神が宿るとは考えない。神は自然の創造者であられ、自然を越えた天におられると信じている。しかしもう一ヶ所神のいましたもう所があることを信じている。それは「人と人が愛し合う」ところである。なぜなら神の本質は

愛だからである。聖書によると、人は神に似せて造られたと教えられている。神の一体どこに似たのか。それは「愛」である。人は他と愛し合うとき、最も神に近くなる。キリストも何度なく弟子たちに「愛せよ」と教えられた。「敵を愛せよ」はその究極の教えである。

現代社会の住みにくさを乗り越えるために今一番必要なのは、愛する心である。私たちの社会のあらゆるところで愛が失われていっている。環境破壊も愛によって乗り越えられると信じる。森の神から愛の神へ。私たちの宗教的転換が求められている。

ある愛の出来事

―本当の自分を見出すところ―



青山学院大学国際政治経済学部教授
大学宗教主任 嶋田 順好

●イザヤ書 四三章四節
●ルカによる福音書 一九章一一〇節

私たちはともすると、自分のことは自分が一番分かっていると錯覚し、罪や破れに満ちた自分の姿をありのままに見つめようとしないところがあります。エリコの町の徴税人のかしらザアカイも、そのような者の一人でした。彼は、ローマ帝国の手先となって同胞のユダヤ人達から税金を徴収する仕事をしていました。徴税人は、ローマの権威を笠に着て、不正な取り立てをしながら私腹を肥やすことを常としており、同胞のユダヤ人達からは罪人として忌み嫌わ

れ、蔑まれていました。ザアカイは金だけは誰にも負けなほどたくさん持っていたかもしれないませんが、神からも、人からも見放された者として、一人寂しく生活をしていかなければならなかったのです。ザアカイは主イエス一行がエリコの町に来られたことを知ると、主イエスを見たいとの激しい好奇心に突き動かされ、仕事もほっぽりだして主のあとを追いかけます。残念ながら彼は背が低かったので主を見ることはできませんでしたが、それでも持ち前の機転を利かし、これから主イエスの一行が赴くであろう方向に脱兎のごとく先回りし、その

場にあった大きないちじく桑の木に登って、高みの見物を決め込むのです。よくよく考えてみると、いい歳した大人がガキ大将のように木登りをするなんてみっともないし、滑稽なことではないでしょうか。しかし、彼はこの時、見栄も外聞もかなくなり捨てて、そうせずにはいられない熱き衝動に促されていたのです。この出来事の直前にはエリコの町の盲人が、「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」と必死に救いを求めて叫び続けた姿が記されています。それとは対照的に、ザアカイは一言も声を出さず、じっと黙ったまま主が通りすぎるのを見ようとしただけなのです。その限り彼は好奇心からこのような突飛な行動に出たことでした。もちろん、この時のザアカイは、自分が主の前に進み出る値打ちも資格もない罪人だと思っ

ていました。だから、彼は主を一瞥することができさえすればそれだけで満足したことでしう。しかし、彼の好奇心の底には、ザアカイ自身も気付かずにいた、真実の愛の交わりを求める渇きがあったのです。主イエスは、その渇けるザアカイの思いを探り当て、まっしぐらに彼のもとに接近し「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と招いてくださいました。それは何年もの間、ついぞ聞かされたことのない真実な愛の交わりへの招きでした。予想もしなかった事態の展開に彼は驚き、恐れ、大喜びで主イエスの懐に飛び込んでいき、我が家に迎え入れられました。そこで、彼は財産の半分を貧しい人々に施し、不正に税金を取り立てた人々に四倍にして返すと申し出るのです。これまでの自分の歩みを、心の底から悔い改めたからです。この時、ザアカイは主イエスの愛のなかで本当の自分を取り戻すことができたのです。

春季特別 説教者紹介 伝道礼拝

◆濱田辰雄牧師
一九七〇年國學院大学文学部日本史学科卒業後、日本聖書神学校入学。
一九七六年同校卒業後、日本基督教団緑聖教会牧師に就任し現在に至る。

また同年から、女子聖学院短期大学非常勤講師、同大学キリスト教センター幹事を歴任し、二〇〇五年聖学院みどり幼稚園長就任。

【濱田先生には、五月一日に多賀城、土樋(夜)の礼拝を担当していただきました】

◆嶋田順好牧師
一九七四年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業後、銀行勤務を経て東京神学大学に学士編入し、一九八〇年同大学大学院博士課程前期課程修了。
修了後、日本基督教団中渋谷教会主任担任教師を兼ねながら、青山学院女子短期大学兼任講師、青山学院大学国際政治経済学部助教・大学宗教主任を経て、現在同大学同学部教授・大学宗教主任。
【嶋田先生には、五月一日に泉、一二日に土樋(朝)の礼拝を担当していただきました】

説教

人間の創造



院長
倉松 功

●創世記 一章一―三節、二六―二八節

一章一―三節

1 初めに、神は天地を創造された。2 地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。3 神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。

二六―二八節

26 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、

人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

27 神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。28 神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

新学年の始めを迎えております。皆さんの大半の方は、大学生活そのものも、またその始めではないかと思えます。先程、読みました聖書は、聖書の冒頭の所であります。そこには、はじめの中のはじめともいべき、宇宙のはじめ、宇宙の創造の物語が記されております。もちろんここに書かれているのは、自然科学・宇宙物理学が理解し、説明するような宇宙の始めではありません。宗教的な解釈、理解であります。しかし、宗教解釈であっても、それは自然科学的解釈と矛盾するものであってはなりません。ではどんな宗教解釈でしょうか。

まず、「はじめ」についてです。これは、時間のはじめと考えられます。時間は過去、現在、未来と線的なものです。創造を時間のはじめとした有名な人物として、古代末期に現れ、ヨーロッパ中世を導いたアウグスティヌスがおります。皆さんが、名前を知っておられると思いますのは、C・F・v・ヴァイツェッカーであります。彼は、量子力学の開拓者ニールス・ボーアやハイゼンベルクの弟子で、原子核の研究、宇宙進化論の研究者として有名な科学者であります。彼もまた、このはじめを時間のはじめと理解しました。はじめがあれば、それが過去、現在、未来、そして時の終り、というように終りの時を理解したのです。

要するに、聖書のいうはじめは、それが同時に目標で、終りをその中に内蔵しています。その理由は、はじめが、時のはじめであり、時間は終り、目標に至るということだけではないのです。聖書の一番終りヨハネの黙示録二二・一三に、「私ははじめであり、終りである」と記されているように、キリストがはじめであり、終り、歴史の目標であるということなのです。そのような考え方の文化が、現代の代表的詩人T・S・エリオットのいっているように、キリスト教によって生み出された文化です。

ところで、創世記の天地創造の記事は、自然科学を学び始めている皆さんには、少し唐突に思われるかもしれません。この世界、宇宙はいつ、どのようにして始まったか。それについて、最近の自然科学の説明とは違います。ある高名の物理学者は、一五〇億年前、超高密、超高温のエン

ルギーの塊が大爆発（ビッグ・バン）を起こし、それからこの宇宙の歴史は始まったと、説明しております。しかし、自然科学はこの宇宙、世界は何を指し、どんな目標に向かって進んでいるのか、その意味について、何も答えません。若し、自然科学がそれに答え、それについて語るようなことがあるとするなら、それは自然科学ではなく、哲学や宗教ということになるのではないでしょうか。

よく知られた言葉があります。すなわち、神は愛の対象として、この世界を創造しました。しかも、人間は神に似せて造られ、地とそれに属するすべての被造物を、自然を、支配するように神に命じられました。

積をした人もいたでしょう。しかし、地を治めよ、従わせというのは、神の命令でありますので、神に代わって治めるといことであり、神が治めるように治めよ、というのが、宗教改革者ルターをはじめ一般的な理解であります。そこで、問題は、神に代わって治め、神が治めるように治めるべき人間が、神を排除したことに、今日の問題であるといわねばなりません。それが、今日、キリスト教が世界に問いかけていることなのです。

アメリカを代表するハーヴァード、プリンストン、エールといった大学はすべてキリスト教の大学です。本学のようなプロテスタント大学であり、そのように学問や理性を大切にすると同時に、学問や理性だけで事足るとせず、例えば、この世界の目的について、人生の意味や目的について、宗教に耳を傾けなくてはなりません。

葉は理解できないでしょう。実は、『学問のすすめ』の言葉は「アメリカの独立宣言」の引用なのです。創世記の人間の創造の言葉なしには、「アメリカの独立宣言」もなかったといえるでしょう。すべての人は神に似せて平等に創られたということを除いて、現実の人間の才能、富などさまざまな社会的不平等をこえて、人間の尊厳、平等の根拠はないでしょう。そもそも生まれながらにして、不平等と思えるものを超えて、一人一人人間の価値は平等と主張しうるのは、人間は等しく神に似せて創られたと宣言している創世記の言葉（聖書の価値観）だけではないかと思われまます。

神がこの世界を創造したというのでありますが、それは、なぜ神は、この世界を創造したのでしょうか。旧約外典（ソロモンの知恵の書十一・二二―二六）に、神は、創造したものを愛し、何一つ嫌わない。憎んでいるなら、造らなかつたはずである、という

神が人間に地を治めよ、従わせと命令したからだと、日本人だけでなく、ヨーロッパ人自体が言っております。確かに、人間が勝手気ままに、自然界を、動植物を支配するという意味に、勝手な解

キリスト教は、聖書に従って、学問、理性、自然科学の発達を決して、蔑ろにせず、大切にしてきました。それは、日本だけでなく、世界における大学の発達の歴史を見ればよいでしょう。例えば特に、

クリスト教は、聖書に従って、学問、理性、自然科学の発達を決して、蔑ろにせず、大切にしてきました。それは、日本だけでなく、世界における大学の発達の歴史を見ればよいでしょう。例えば特に、

クリスト教は、聖書に従って、学問、理性、自然科学の発達を決して、蔑ろにせず、大切にしてきました。それは、日本だけでなく、世界における大学の発達の歴史を見ればよいでしょう。例えば特に、

青葉が目まぶしい季節に
なりました。新入生にとって
は、五月病から立ち直って自
分のペースをつか
みかけるチャンス
です。今年泉から
土樋に移った三年
生の諸君も、新し
いキャンパスにだ
んだん慣れてきた
のではないでしょう
か。四年
生の皆さんは、残り僅かとなっ
た学生生活を悔いのないよう
に過ごして下さい。



土樋キャンパス
主任 教授 北

土樋に移った三年生の諸君も、新しいキャンパスにだんだん慣れてきたのではないのでしょうか。四年生の皆さんは、残り僅かとなった学生生活を悔いのないよう

に過ごして下さい。ところで宗教部では、学生の皆さんがよりキリスト教に
関心を持ち、
聖書を学ぶ
ことができ
るようにと
いう願いを
込めて、聖
書研究会や
サマー・カレッジといった場
を設けています。どうかこの
ような機会を積極的に活用し

て下さい。それから、毎日の
礼拝を生活のリズムのため
にうまく生かして下さい。チャ
ペルで賛美歌と祈りと聖書の
言葉にリフレッシュされて、
生き生きとしたキャンパスラ
イフを送りましょう。

多賀城キャンパス



多賀城キャンパス
主任 教授 野村

多賀城キャンパスは、入学式のところは、桜が大変きれいでしたが、すっかり緑の季節になりました。大学の勉強は、高校と違って自主的に取り組み、単位を修得しなくてはなりませんので、多少、戸惑いもあるかもしれません。が、新入生は新しい環境に早く慣れて、充実した毎日を送って欲しいものです。また大学礼拝も大勢の新入

生を迎えて始められました。それぞれの司会の先生たちは、学生諸君たち出来るだけ良いメッセージを語ろうとしていますので、これからキャンパスに午前中の時には、遅刻しないように心がけ、礼拝に出る習慣を大切にして下さい。なお、チャペルの一階の小部屋で火曜日のお昼に、数名

各キャンパスのメッセージ

で聖書を読んでいます。キリスト教や聖書について関心のある人や質問のある人も、また誰でも参加できます。ぜひ一緒に短い一時ですが、ここに来てください。軽食付きです。

泉キャンパス



泉キャンパス
主任 教授 永井 義之

新緑が目まぶしいと感じられるこの頃、新入生諸君が大分入学当初と比べると大学生活に慣れてきた印象があります。日々の礼拝も多くの学生諸君の参加を得て守られていることを喜んでいます。当初は緊張して何が始まるのかといった雰囲気でしたが、だんだん礼拝の様子がわかってきて一種の「慣れ」が見られるような気もいたします。礼拝は聖書の言葉を聞く機会ですが、これはよく毎日の食事にもたとえられます。生き

るのに不可欠な食事は、毎日決まった時間によほどのことがない限り食べるといいう行為を繰り返していきます。毎回ご馳走というわけではなくても、とにかく食べるのです。生きていくのに欠かせないからです。同じように礼拝における「神の言葉の摂取」も日々の欠かせないものとしてわたしたちの心の習慣となるよう心身を整えたいものです。

第31回 サマー・カレッジのご案内

学生そして教職員の皆さん、宗教部主催による恒例の『サマー・カレッジ』が今年も開催されることになりました。秋保の大自然の中で、学生・教職員が数日間の生活を共にし、聖書や讃美歌に親しみ、人生のいろいろな問題を語り合いたいと思います。ホールサムインばんじを会場とし、リラックスした楽しいプログラムを数多く準備しております。一人でも多くの方々がこの『サマー・カレッジ』に参加して、有意義な時間を共有し、数多くの『出会い』を体験されますよう、心から念願してご案内いたします。

■日 時 7月26日(火)～28日(木) 2泊3日
(文・経済・法・教養学部対象)
8月4日(木)～5日(金) 1泊2日
(工学部対象)

■プログラム オープニングフェローシップ・アワー
晩祷、キリスト教プロムナード、朝天礼拝、バイブル・イルミネーション、スポーツ、ゴスペル・マジック、共に歌おう、クロージング

■対 象 学生・教職員

■参加費 8,000円

■申込締切 7月16日(土)
(詳しいプログラムと申込書は下記申込先と各キャンパス礼拝堂に掲示・配布します)

※ 申込先

- ・土樋キャンパス 5号館5階総務課・宗教事務課
- ・泉キャンパス 1号館2階庶務係
- ・多賀城キャンパス 庶務係

いです。
(NA)

編集後記

今回は春の特別礼拝の原稿を講師の方々からいただき掲載することになりました。ただ四箇所で行われた説教のうち紙面の都合で泉と多賀城キャンパス分しか載せることができず残念でした。紙面を通してもう一度味わっていただければ幸いです。

- して解説する。
- 佐々木勝彦『生きる』(青踏社、二〇〇一年)
- ―やさしいキリスト教入門。カルト宗教や「オカルト」についても説明。
- 佐々木勝彦『読む』(青踏社、二〇〇一年)
- ―旧・新約聖書入門。「善き
- 佐々木勝彦『わたしはある』(ユダヤ教徒・キリスト教徒・イスラム教徒理解を深める。)
- ―二つの物語の関係を探り、
- 佐々木勝彦『旅するーバベルの塔とアブラハム』(青踏社、二〇〇四年)
- ―モーセと現代』(青踏社、二〇〇四年)
- ―モーセの神との出会い、そして「十戒」をとおして、聖書の神の本質を探る。
- 原口尚彰『聖書の世界への招待』(キリスト新聞社、二〇〇二年)
- ―旧・新約聖書に親しみ、その内容の要点を理解し、その意味を考えるための入門書。
- 原口尚彰『地球市民とキリスト教』(キリスト新聞社、二〇〇三年)
- ―グローバル化する現代世界の倫理的諸問題をキリスト教の視点から論じる。
- 原口尚彰『信じることと知ること―新しいキリスト教概説』(東北大学出版会、二〇〇五年)
- ―キリスト教の本質を、その基本的な教理に焦点を当てつつ、論じる。
- 西谷幸介『十字架の七つの言葉』(ヨルダン社、改訂三版二〇〇三年)
- ―事切れる間際のイエスの十字架の七言の解き明かしに基づいたキリスト教入門書。)